

中世医書と仏教信仰—梶原性全著『頓医抄』における鬼・鬼神を手がかりとして—

進藤浩司 (名古屋大学)

近世以前、仏教者は祈祷や看病などを通して病者に接していた。大陸の文物に触れることの多かった僧侶は、中国の医方書を学びながら、医療の発展にも寄与していたものと思われる。本発表では、鎌倉を舞台に活躍した僧医・梶原性全 (1266 — 1337) の著述を題材に、中世医書に記載される仏教的・信仰的要素を検討する。

梶原性全 (1266 — 1337) は、『頓医抄』と『万安方』という二つの医書を著している。『頓医抄』は『聖恵方』、『万安方』は『聖濟総録』から大きな影響を受け、ともに宋代の医書を主要な典拠とするといわれるが、中国欽定医方書とは異なる仏教思想の影響や、俗信的要素も看過できない重要な位置を占める。一般的には本邦初の仮名書き医書として知られている『頓医抄』において、よりその傾向が強い。そこで、本研究では『頓医抄』に史料参考の比重を置きながら、信仰と医療の関係を探りたい。

仏教信仰からの影響がうかがえる病気の原因としては、業 (業病) や鬼 (鬼病) の観念が挙げられる。たとえば、『万安方』巻十「諸瘡門」に記される「鬼」(摩羅羅鬼) の図像は、顔が鶏であり大きな鎚を持つものである。これは、瘡 (おこり) の原因の一つを鬼としたものである。「鬼」の観念は、中国医方にも見られるが、瘡病には祈祷を用いるとあり、また類似する鬼 (疫鬼) の図像や記事は、『政事要略』『溪嵐拾葉集』等にも見出されるため、仏教信仰の文脈で理解されていると考えられる。また、この鬼は瘡病の原因となるが、病が悪化すると癆瘵 (肺結核。伝尸にほぼ同じ) になると記され、三尸に対する理解との関連も考えられる。病の原因のうち、霊的要因については祈祷や修善を用いるといい、医道と仏道との融合がみられる一方、役割分担も意識されている。

梶原性全は、霊的要因に対する祈祷の必要性を認めるが、医術そのものへの守護や治療の効果にも、仏や諸天の守護の力が及ぶ。『頓医抄』巻四十六「医師要心」では、医師の病者に対する心がけを説く。医師の道徳を説く過程で、正しき医療を行う医師と医療に対する鬼神の守護についても論じているのである。性全は中国的な鬼神の術語を用いながらも、それを仏教的に解釈している。「医師要心」は、唐時代の孫思邈『千金要方』の「大医精诚」を元に作成されているが、その『千金要方』には鬼神による医師に対する守護が記されている。医師が私欲を離れて医道を行えば、医師を鬼神が守護するという内容である。しかし、『頓医抄』では、鬼神は医療の効果そのものをも守護すると解釈され、また正しき医療を行うことは諸天善神に守護せられ、あるいは仏道の完成にもなり、『千金要方』の鬼神を仏教信仰に組み込む。中国思想の日本化、仏教化と見ることが可能である。慈悲に基づき、道徳的に正しい医療が神仏の守護を受けることは、その後の日本の医書にも引き継がれている。

〔キーワード〕 梶原性全、頓医抄、万安方、仏教医学